# 令和８年度　式下中学校　全国学力・学習状況調査結果の概要について

はじめに

今年度も実施された全国学力・学習状況調査は、生徒の学力・学習状況や生活状況を把握・分析し、前年度までの結果と比較するなどして、これまでの取組の成果を検証するとともに、課題の分析から改善への今後の取組につないでいます。同時に教育施策の改善を図るとともに、生徒への指導の充実や学習状況の改善に役立てることを目的としています。川西町・三宅町式下中学校組合教育委員会は、本年度４月に実施した全国学力・学習状況調査の結果を式下中学校と共に分析し公表することで、保護者や住民のみなさまの教育への関心をさらに高めていただく機会となることを願っています。将来にはばたく地域の子どもたちの健全な育成には、学校と地域・家庭との連携が不可欠です。今後とも引き続きご理解とご支援をいただきますようお願いします。

なお、本調査結果は、学力の特定の一部分であることや学校における教育活動の一側面に過ぎないこと、また、学校では生徒・教職員が力を合わせて、様々な活動に取り組んで現在も進めていること等を十分ご理解いただき、今後ともご協力よろしくお願い申し上げます。

令和８年１０月　川西町・三宅町式下中学校組合教育委員会

## １　調査の概要

（１）実施日　　令和８年４月２０日（月）オンライン：英語「きく よむ かく」・生徒質問
４月２３日（木）紙：国語・数学
５月７日（木）オンライン：英語「はなす」

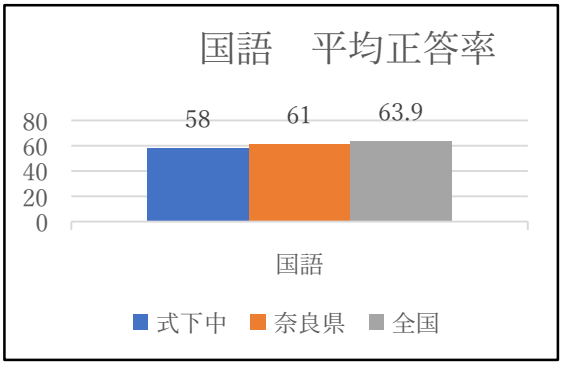
（２）調査対象　　川西町・三宅町式下中学校組合立式下中学校３年生

（３）調査内容　　＜教科に関する調査：国語・数学・英語＞
＜生徒質問調査：学習意欲・学習方法・学習環境・生活の諸側面などに関する調査＞

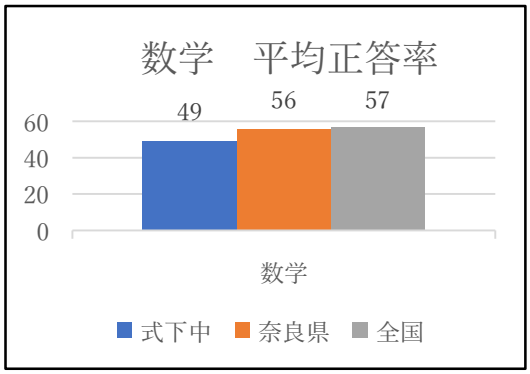
## ２　調査の目的

生徒の学力や学習状況の一側面を、教科による調査や質問調査を分析・考察することによって把握し、授業改善や生活意識・生活習慣の向上につなげることを目的として実施するものです。

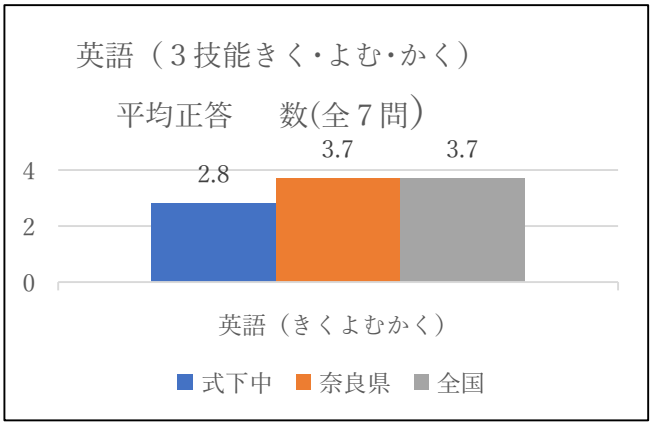
## ３　各教科の平均正答率（英語は平均正答数）



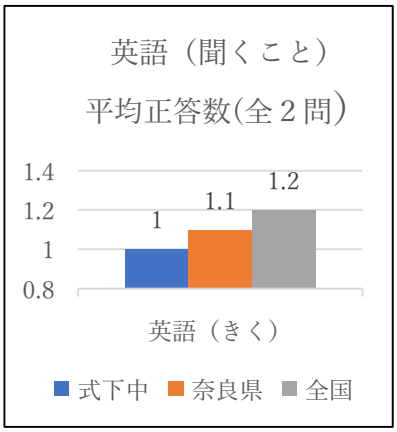

国語の平均正答率は、式下中５８％（全国比－5.9 P）でした。

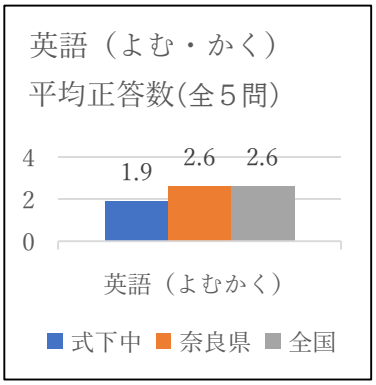


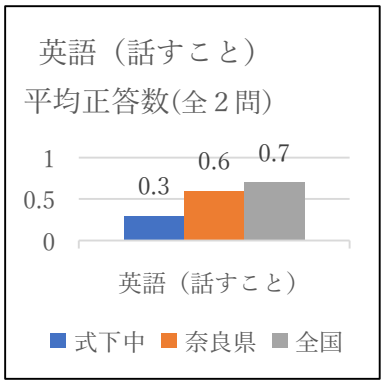

数学の平均正答率は、式下中４９％(全国比－8 P）でした。




英語（きく・よむ・かく）の平均正答数は、式下中 2.8（全国比－0.9 P）でした。




※話すことは３技能の後に結果がきたため下記考察に含まず

# 4　各教科の調査結果を受けての考察

## 【国語】

国語の正答率は、校内平均正答率 58%（全国比－5.9P）である。問題形式別平均正答率を見ると、「記述式」は 35.2%（全国比－10.3P）、「選択式」は 67.8%（全国比－4.9P）、「短答式」は 49.5%（全国比－6.3P）であった。

評価の観点別平均正答率は、「知識・技能」が 57.5%（全国比－6.7P）、「思考・判断・表現」は 57.6%（全国比－6.1P）となっている。

●特に、全国の正答率と比べ、低かったものとして、次のような問題が挙げられる。

①段落相互の関係を明確にし、文章の展開を工夫することができるかどうかをみる。他者の発言と結び付けて自分の考えをまとめることができるかどうかをみる。３三 **（思・判）** 48.4%（全国比－16.6P）

②文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにすることができるかどうかをみる。４四 **（思・判）** 23.1%（全国比－15.8P）

③情報と情報との関係の様々な表し方を理解し使うことができるかどうかをみる。２三 **（知・技）** 59.3%（全国比－11.1P）

〈考察〉

全般的に全国平均を下回る中、特に「記述式」の低迷（35.2%、全国比－10.3P）が目立ちます。観点別では「知識・技能」「思考・判断・表現」ともに差が見られますが、設問ごとの傾向から課題の本質が読み取れます。

特に低下が著しいのは、情報の関係性を把握し、自らの考えを深めて表現する設問です。情報の関係性の理解（２三）や文章の展開工夫・他者意見との結合（３三）、読解に基づく意見形成（４四）のいずれも全国比で 10～16P 以上低い結果となっています。これは、単に文章を「読む」段階にとどまり、情報を整理・分析して自分の考えへと再構築する「統合的な言語活動」に大きな課題があることを示しています。

指導においては、段落や情報同士の構造的な繋がりを図式化等で整理させ、根拠を持って自分の意見をまとめる学習機会の拡充が不可欠です。小ステップでの記述指導が学力向上につながると考えます。

〈参考〉

生徒質問調査（国１）「今回の国語の問題では、解答を文章で書く問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか。」という質問に対し、「書く問題で解答しなかったり、途中であきらめたりしたものがあった。」と回答した生徒が 27.5%（全国比+7.1P）、「書く問題は全く解答しなかった」と回答した生徒が 8.8%（全国比+5.5P）に上りました。この結果からも、粘り強く取り組む姿勢が十分に定着していない様子が見受けられます。

特に、「思考力・判断力・表現力等」の分野では「書くこと」 60.4%（全国比－7.4P）、「話すこと・聞くこと」 56.8%（全国比－7.1P）の分野において、全国平均を大きく下回っています。あわせて、「書く」問題については無回答率が全国平均を大きく上回っています。

## 【数学】

数学の正答率は、校内平均正答率 49.0%（全国比-8.0P）である。

学習指導要領の領域で正答率を見ると、「数と式」は 62.6%（全国比-5.2P）、「図形」は 37.5%（全国比-11.2P）、「関数」は 43.5%（全国比-11.3P）、「データの活用」は 46.2%（全国比-7.3P）であった。

評価の観点で正答率を見ると、「知識・技能」は 56.8%（全国比-6.2P）、「思考・判断・表現」は 24.2%（全国比-14.9P）となっている。

◎正答率が全国平均よりも高かったものとして、次のような問題が挙げられる。

①同類項の意味を理解しているかどうかをみる。２ **（知・技）** 73.9%（全国比+3.4P）

②具体的な場面において、正の数と負の数を用いて変化や状況を表すことができるかどうかをみる。１（知・技） 88.0%(全国比+2.3P)

●特に全国の正答率と比べ、低かったものとして、次のような問題が挙げられる。
①筋道を立てて考え、証明することができるかどうかをみる。
８（２）**（思・判）** 23.9%（全国比－22.2P）
②数学的に表現したことを事象に即して解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができるかどうかをみる。７（２）**（思・判）** 17.4%（全国比－16.5P）
③統合的・発展的に考え、事柄の特徴を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる。
６（３）**（思・判）** 29.3%（全国比－15.3P）
④累積度数の意味を理解しているかどうかを見る。９（１）**（知・技）** 33.7%
（全国比－12.3P）
⑤具体的な事象において、考察の対象となる角を的確に捉えることができるかどうかをみる。
８（１）**（知・技）** 52.2%（全国比－10.3P）

〈考察〉
計算問題など「知識・技能」の基礎（同類項や正負の数）では、全国を上回る強みが見られるものの、全体としては「思考・判断・表現」の低迷（24.2%、全国比－14.9P）と領域別での「図形」「関数」の課題（ともに全国比－11P超）が顕著です。
特に課題となるのは、筋道を立てて説明・証明する力です。証明（８（２））や数学的説明（７（２））、特徴の表現（６（３））といった記述・論理的思考を問う問題で全国比－15～22P超と大きな差が開いています。基礎的な知識は定着している一方で、それらを統合して事象に適用したり、筋道を立てて言葉や式で表現したりする学びの活用段階に大きな障壁があります。
今後の指導では、単なる計算練習にとどまらず、「なぜその手順になるのか」「どのように考えて証明に至るのか」を根拠とともに説明し合う対話的・探究的な学習の拡充が必要です。段階的な記述ワークを取り入れることが学力向上への鍵となります。

〈参考〉
領域別の正答率では「数と式」「図形」「関数」「データの活用」のすべての領域で全国平均を下回っており、「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点でも全国平均を下回っていることから、基礎・基本の定着が不十分であると考えられます。問題番号８（２）の正答率が著しく低い点からも、「思考・判断・表現」の定着に課題があることがうかがえます。さらに、ほぼすべての問題において、無回答率が全国平均よりも高く、数学に対する苦手意識を払拭しきれていない状況も懸念されます。
生徒質問調査（数１）「今回の数学の問題では、解答を言葉や数、式を使って説明する問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか。」という質問に対し、「書く問題で解答しなかったり、途中であきらめたりしたものがあった。」と回答した生徒が 40.2%（全国比+4.1P）、「書く問題は全く解答しなかった」と回答した生徒が 13.0%（全国比+8.9P）に上りました。
特に、「思考力・判断力・表現力等」の分野では 24.2%（全国比－14.9P）、記述式においては、24.2%（全国比－14.9P）と、全国平均を大きく下回っています。
調査の結果を見ると、(62)「数学の授業の内容はよく分かりますか」という質問に肯定的な回答をした生徒は 69.8%いることを踏まえ、今後は、「分かる」から「できる」へと繋げるために、生徒が自ら積極的に学びに向かうための工夫が必要です。
さらに、（63）「数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思いますか」という質問に対し、否定的な回答をした生徒は 24.2%でした。４人に１人は数学の有用性を実感できていないことを示しています。そのため、日々の生活の中で、数学が生活や社会で役立っている事例を紹介するとともに、生徒自身が自発的に見つけられるような意識付けを行っていきたいと考えています。
今後も一人ひとりの生徒が「わかった。」「できた。」を実感できる授業を目指し、基礎・基本の定着を図ることで、数学が苦手な生徒を減らしていきたいです。また、教え合いの活動をさらに工夫し、生徒同士が深く学び合える授業展開をすることで、家庭学習への意欲にも繋げていきたいと考えています。

## 【英語３技能】

学習指導要領の領域：「読むこと」について
●特に、全国の正答率と比べ、低かったものとして、次のような問題が挙げられる。
①日常的な話題について、自分の置かれた状況などから判断して、必要な情報を読み取ることができるかどうかをみる。８**（思・判）**34.4%（全国比－29.4P）
②日常的な話題について、目的に応じて、必要な情報を読み取ることができるかどうかをみる。
７**（思・判）** 53.1%（全国比－19.3P）
③音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、読むことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けているかどうかをみる。６（**知・技**）53.7%（全国比－13.6P）
④社会的な話題について、短い文章を読み、要点を捉え、考えとその理由を書くことができるかどうかをみる。１０（１）**（思・判）**34.7%（全国比－12.8P）

学習指導要領の領域：「書くこと」について
●特に、全国の正答率と比べ、低かったものとして、次のような問題が挙げられる。
①日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある文章を書くことができるかどうかをみる。１３**（思・判）**15.6%（全国比－28.4P）
②日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある文章を書くことが

できるかどうかをみる。１２**（思・判）** 22.6%（全国比－24.9P）
③音声や語彙、表現、言語の働きなどの知識を、聞くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けているかどうかをみる。１１①（**思・判**）37.9%（全国比－21.0P）
④日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある文章を書くことができるかどうかをみる。１４**（思・判）**12.5%（全国比－15.3P）
⑤社会的な話題について、短い文章を読み、要点を捉え、考えとその理由を書くことができるかどうかをみる。１０（２）**（思・判）**14.7%（全国比－13.1P）

学習指導要領の領域：「聞くこと」について
●特に、全国の正答率と比べ、低かったものとして、次のような問題が挙げられる。
①日常的な話題について、話を聞き、概要を捉えることができるかどうかをみる。
４**（思・判）**15.6%（全国比－28.2P）
②日常的な話題について、自分の置かれた状況などから判断して、必要な情報を聞き取ることができるかどうかをみる。３**（思・判）** 56.3%（全国比－19.7P）
③日常的な話題について、目的に応じて、必要な情報を聞き取ることができるかどうかをみる。
２（思・判）64.5%（全国比－14.0P）
④音声や語彙、表現、言語の働きなどの知識を、聞くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けているかどうかをみる。１**（知・技）**48.4%（全国比－11.8P）

〈考察〉
〇学習指導要領の領域：「読むこと」について
英語の「読むこと」領域では、全国平均を大幅に下回る厳しい結果となりました。
特に日常的な場面で状況や目的に応じて必要な情報を読み取る設問（８・７）で全国比－19～29P 超と大きな差が開いています。
これは、単語や文法知識の丸暗記にとどまり、実際のコミュニケーション場面で情報を走査・特定する「実用的な読解スキル」が定着していないことを示します。また、要点を捉えて意見と理由を書く設問（10（1））の低迷からは、読解とアウトプットの連携不足も伺えます。今後は、目的を持って必要な情報を探す読みの練習や、読んだ内容をもとに自分の意見を構成する統合的な指導が必要であると考えます。

〇学習指導要領の領域：「書くこと」について
「書くこと」領域では、多くの設問で正答率が 10～20%台にとどまり、全国比で－20P 超と非常に深刻な課題が見られます。特に、日常的な話題について事実や考えを整理し、まとまりのある文章を書く設問（13・12 等）の低迷が顕著です。
単語や文法の知識単体ではなく、「文脈に合わせて自分の考えを構成・表現する活用力」が著しく不足していることが窺えます。白紙のまま諦めてしまう生徒が多いことも推測されます。
今後は、定型文（型）を用いた表現練習や、思考を整理するためのワークシートの活用など、スモールステップで「英文をまとめる」指導を徹底し、書くことへの心理的ハードルを下げることが急務だと考えます。

〇学習指導要領の領域：「聞くこと」について
「聞くこと」領域では、全般的に全国平均を下回り、特に全体の「概要を捉える」設問（４）で正答率 15.6%（全国比－28.2P）と大きな落ち込みが見られます。
必要な情報を聞き取る設問（３・２）も同様に低迷していることから、聞こえてきた音声単語の断片的な聞き取りにとどまり、文脈や目的に合わせて情報を整理・判断する「聞き取りの活用力」が不足していることが窺えます。
指導に向けては、単に英語を聞かせるだけでなく、「何のために」「どのような情報を聞き取るのか」という目的意識を持たせるリスニング活動や、聞き取った概要をメモや言葉で要約・可視化させるトレーニングの強化が求められます。

※本校の平均 IRT スコアは 443 であり、全国平均（499）を大きく下回る厳しい結果となっています。一方で、標準偏差を見ると全国（113.7）に対し本校は 91.5 と小さく、生徒の学力層が全国に比べて平均値のまわりにキュッと集まっています（個人差が小さい）。また、数学においては、下位層が多い傾向が見られます。極端な上位層・下位層のブレは少ないものの、全体として基礎・基本の理解度を底上げし、グループ全体の学力水準を引き上げていく集団指導の工夫が求められます。

〈参考〉
生徒質問調査（69）「英語の勉強は好きですか。」に対する肯定的解答は 41.8%（全国比－9.4P）、（71）「英語の授業の内容はよく分かりますか。」に対する肯定的解答も 47.3%（全国比－16.9P）と、双方で全国平均を下回っています。特に「理解実感」で約 17P もの大きな差が開いている点が深刻です。
「分からない」という授業理解の低さが、そのまま英語学習への苦手意識や「嫌い」といった負の感情に直結している悪循環が見受けられます。この意識の低下は、前述の「読む・書く・聞く」におけるパフォーマンスの低迷や無解答率の高さとも深く連動していると考えられると同時に、授業改善の必要性が急務であると考えます。

指導改善に向けては、授業内で「分かった」「できた」という達成感を積み重ねられるよう、教材の細分化やスモールステップでの定着を図り、学習への心理的ハードルを下げることが最優先の課題であると考えます。

## 【生徒質問調査】

《基本的な生活習慣》

（1）「朝食を毎日食べている」85.7%《全国比－5.2P》（昨年度：全国比－8.6P）

（2）「毎日同じくらいの時刻に寝ている」67.1%《全国比－13.4P》（昨年度：全国比－13.3P）

（3）「毎日同じ時刻に起きている」93.4%《全国比＋1.0P》（昨年度：全国比－21.4P）
これらについて、昨年度より肯定的な回答が増えた面がある。しかし、

（4）普段平日、1日当たりどれくらいの時間、スマホや携帯電話、PC、タブレット、ゲーム機、TV 等で SNS や動画視聴などを３時間以上する。が 69.2%にのぼり、全国平均の 49.6%を 19.6P も上回った。そのうち４時間以上するが 54.9%もあり、寝る時刻の不安定さ等や、スマートフォン等を使用する時間が長いことと、睡眠時間が短いことについては学習意欲等と結びつく結果と言えます。

《自尊感情・自己実現》

(8)「自分には、よいところがあると思いますか」83.6%《全国比-0.4P》（昨年度：全国比-2.3P）

（10）「将来の夢や目標を持っている」に対して肯定的に答えた生徒は 58.3%で、全国値に比べて低かった。（－9.3P）（昨年度：全国比-8.9P）

(15)「学校へ行くのは楽しいと思いますか」は 84.7%《全国比-0.7P》（昨年度：74.7%全国比-11.4P）で、肯定的に捉える数値が増えた。

《道徳心》

(11)「人が困っているときには、進んで助けていますか」に対しての肯定的な回答は 92.3%になり、《全国比＋1.5P》（昨年度：全国比－10.5P）自分に精一杯の状態から、いい方向に変化がみられた。

(12)「いじめは、どんな理由があってもいけない」に対しての肯定的な回答は 93.4%で、《全国比－1.7P》（昨年度：95.4%で全国比-0.5P）今回も全国平均とほぼ並んで、望ましい方向に向かっている。

(14)「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」に対して肯定的な回答は 96.7%になり、《全国比＋0.8P》（昨年度：全国比－21.9P）昨年度から大きく変化をみせ、いい傾向になっている。

《学習》

（16）「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」について肯定的な回答が全国値に比べて 7.8P 多かった。興味・関心を持ち、主体的に取り組もうとする姿勢が芽生えてきている。

（19）「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」について、２時間以上という回答が 38.5%と全国値に比べて 8.4P 多かった。

《ICT 機器活用》

（18）「学校の授業以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、PC・タブレットなどの ICT 機器を勉強のために使っていますか。（遊びなどの目的に使う時間は除く）」について、「30 分より少ない・全く使っていない」と回答した生徒が 37.4%であった。昨年に比べると授業以外で PC・タブレットなどの ICT 機器を使う時間が増えてきている。

# 5　学力向上に向けた今後の取組について

①全国学力調査データの「詳細分析」と課題の共通理解

【目標】

・何ができていて、何で躓いているかを具体的に特定する。

・単に「全国平均を〇〇点下回った」で終わらせず、校内全体でデータを分解して分析する。

【具体策】

・無解答率の分析
　特に記述式問題の無解答率が高くないかを確認する。

・設問別の正答率比較
　全国平均と比べて「どの単元」「どの領域（知識・技能／思考・判断・表現）」で乖離が大きいかを特定する。

・学年・教科部会での課題共有
　全教員が「本校の生徒の弱み（例：『文章から条件を読み取って説明する力』が弱いなど）」を1つの共通認識として持つ。

②日々の授業における「工夫」と「授業改善」

【目標】

・思考・判断・表現を促す授業スタイルへシフトする。

・日々の授業の質を組織的に揃える。

【具体策】
・授業構成の共通化
　すべての授業で「本時のめあて」と「振り返り」の時間を必ず設定する。
・アウトプット場面の創出
　「自分の言葉で説明する」「根拠をもとに意見を書く」活動を毎時間の授業に数分でも組み込む。
・相互参観・研究授業
　教科の枠を超えて意見交流し、フィードバックを行う。

③「基礎・基本」の補充学習
【目標】
・つまずきの早期発見と知識・技能の底上げ。
・授業内だけで取りこぼしをカバーするのは難しいため、スキマ時間を構造化して基礎を定着させる。
【具体策】
・１人１台端末（AI ドリル等）の活用
　個々の習熟度に応じた問題を自動配信し、前学年・小学校段階の復習まで遡って学習できる環境を作る。

④家庭学習の「質の改善」と保護者との連携
【目標】
・家庭での学習習慣とメディア利用時間の見直しを行う。
・学力調査の児童生徒質問紙を活用し、生活習慣・学習時間と学力の相関を確認してアプローチする。
【具体策】
・宿題の出し方の見直し
　単なる「作業（写すだけ）」ではなく、「今日の振り返り」や「自学ノート（自分で課題を見つけて解く）」への切り替え。
・家庭学習の手引きの配布
　学年ごと・時期ごとの目指すべき学習時間や具体的な勉強法を明記した「ガイドライン」を作成、保護者と共有する。
・スマホ・ゲームのルール啓発
　学力調査で課題になりやすい「平日長時間利用」について、生徒自身にルールを考えさせる機会（学活・生徒会等）をつくる。

⑤校内 PDCA サイクルの確立と小中連携の推進
【目標】
・取り組みを単発で終わらせず、中長期的に学力を底上げする。
・組織としての継続的な仕組みを構築する。
【具体策】
・教科学力向上プラン（PDCA）の運用
　定期テストや実力テストのたびに教科部会で定着度を検証し、指導計画を修正するサイクルを回していく。
・小学校（校区内）との連携
　小学校と「学習規律（持ち物・挙手・話し方）」「家庭学習の約束」を共通化し、中１ギャップによる学力低下を防ぐ。

このように式下中学校では、調査結果を受け、分析し授業改善を進めていくとしており、川西町・三宅町式下中学校組合教育委員会は、学校のこれらの取組を積極的に支援してまいります。